

ローカーヤタ派と唯物論

辻 本 俊 郎

1. 問題の所在

ローカーヤタ (Lokāyata), あるいは, チャールヴァーカ (Cārvāka) と呼ばれるこの学派は, 正統バラモン学派とその思想体系に真っ向から対立するのみならず, 仏教やジャイナ (Jaina) 教ともその思想体系の趣を異にする。そのため, いつの時代においても, それらの学派から論駁されるべき対象となっていた。

さて, このローカーヤタ派を研究する際に最も痛感される困難な点は, この一派の自らの教義を体系的に記述している独立した論書が全く伝わっていないことである。ローカーヤタ派に属する唯一の文献として『タットヴァ・ウパプラヴァ・シンハ』 (*Tattvopaplavasimha*: Jayarāsi Bhaṭṭa, C. 650-700) がある。それは, その内容がローカーヤタ派の祖ブリハस्पティ (Bṛhaspati) の学説のみに従って, 他のすべての哲学学派の認識論に関する主張を批判しているのであるが, 残念なことにその内容はローカーヤタ派の思想全体を対象としているものではない。

それでは, ローカーヤタ派は『タットヴァ・ウパプラヴァ・シンハ』以外にその思想体系を文字に残さなかったのであろうか。現在, この一派の根本聖典と考えられる『ローカーヤタ・スートラ』 (*Lokāyata-sūtra*, あるいは, *Cārvāka-sūtra*, *Bārhaspatya-sūtra* とも言う) と名付けられるべきものが存在しないのである。しかし, そのことは『ローカーヤタ・スートラ』がかつて一度も著されなかったということを意味するのでは決してない。というのは, 『ロ

ローカーヤタ・スートラ』なる經典の名称、あるいは引用がインド哲学学派の諸文献の中に、多く見られるからである。その例をいくつかあげると、

『百論』卷上では、

「如有經名婆羅呵帝」¹⁾

とある。ここにいう婆羅呵帝とは Bārhaspatya の音写である。また、『ランカーヴァターラ・スートラ (Lankāvatāra-sūtra) では、

Śatasahasraṃ mahamate lokāyatam²⁾ /

マハーマティよ、ローカーヤタは百千〔から成る句や音節〕を有している。とあり、これに対する相当漢訳では、

「大慧。彼世論者乃有百千」³⁾ (求那跋陀羅訳)

「大慧。盧迦耶陀婆羅門所造之論有百千偈」⁴⁾ (菩提流支訳)

「大慧。彼世論有百千字句」⁵⁾ (実叉難陀訳)

とあり、ローカーヤタ派の論書は、百千という数字が示しているように大部であったようである。また、A. D. 8 世紀以降に著されたインド哲学論書には『ローカーヤタ・スートラ』の引用がしばしば見受けられる。例えば、『タットヴァ・サムグラハ・パンジカー』(Tattva-saṃgraha-panjikā: Kamalasila 700-750 A. D.) には、

Tathā ca teṣāṃ (lokāyatānām) sūtram...⁶⁾ /

とあり、また、『アドヴァイタ・ブラフマシッディ』(Advaitabrahmasiddhi: Sadānanda, 15c.) には、

Tathā ca bārhaspatyāni sūtrāṇi...⁷⁾ /

とある。このように、かつてローカーヤタ派には『ローカーヤタ・スートラ』と名付けられるべき經典が存在していたということは明らかである。

ローカーヤタ派の根本經典『ローカーヤタ・スートラ』が、何らかの事情によって現存しない今、ローカーヤタ派の思想理解のためには、インド哲学学派の論書などの諸文献に伝えられるローカーヤタ派の思想をより多く収集し、かつ、整理することが不可欠であると考えられる。

ただし、インド哲学学派の諸文献に見られるローカーヤタ派の思想は、それぞれの学派が自己の立場に基づいて、ローカーヤタ派の思想を批判し、これを

論駁しようとするものであるから、ローカーヤタ派の思想に対して曲解が含まれているであろうことは十分に予想されうることである。そのため、ローカーヤタ派の思想を客観的に捉えようとする場合、ローカーヤタ派の思想を取り巻いている曲解を取り除く必要がある。

そのような状況にあつて、生井衛氏は、ローカーヤタ派の思想を取り巻いている曲解を取り除くため、他学派の諸文献に引用された『ローカーヤタ・ストラ』の断片、または、ローカーヤタ派の祖ブリハスパティに帰せられる詩頌などを収集整理し、その理論体系を再構成することに成功している。⁸⁾

生井氏によると、その主要理論は以下の七項目であるとする。⁹⁾

- (i)正しい認識をもたらす手段 (pramāṇa) として妥当なのは、直接知覚 (pratyakṣa) のみである。
- (ii)地水火風の四物質要素 (bhūta) のみが真の实在 (tattva) であり、万物はその四物質要素の仮の集合にすぎない。
- (iii)精神作用 (caitanya) は四物質要素から生ずる。
- (iv)《見えない力》(adr̥ṣṭa) が世界の創造に関与したり、《善悪の行為の余力》(karmāśaya) として多様な現象を秩序づけたりするのではない。現象の多様性は本性に基づく自然発生的なもの (svābhāvika) である。
- (v)人間存在 (puruṣa) とは身体にほかならず、いわゆる ātman とは身体のことである。
- (vi)他世 (paraloka) はありえない。
- (vii)人間の目的は快楽 (kāma) と利益 (artha) であり、宗教的義務 (dharma) は無益である。

以上のような七項目は、インド哲学論書にみられるローカーヤタ派の次の諸理論に対応するとする。

- (i)pratyakṣaikapramāṇavāda.
- (ii)bhūtamātravāda.
- (iii)bhūtacaitanyavāda.
- (iv)svābhāvavāda, svābhāvikajagadvāda.
- (v)dehātmavāda, dehamātrātmadarśana.

(vi)paralokāpavāda.

(vii)kāmarthavāda.

前述したように、これらの思想は、『ローカーヤタ・スートラ』の断片を収集することにより再構成されたものである。したがって、『ローカーヤタ・スートラ』の断片より明らかとなった思想は体系化されたローカーヤタ派のそれであることは言を俟たない。¹⁰⁾ しかしながら、当然ローカーヤタ派がその初期形態より『ローカーヤタ・スートラ』を編纂するに至るまで發展の変遷があったことは十分に予想されることである。

では、ローカーヤタ派の思想体系は、インド哲学史上、いかなる変遷をたどって發展してきたのであろうか。このことは、もとより、ローカーヤタ派の成立の問題と関わるものであるが、小論では、このような疑問から端を發し、いつ頃、ローカーヤタ派が「唯物論的傾向を有する一学派」として形成されたのであろうかという点に関して資料に基づいて若干の考察を加えたい。¹¹⁾ 従って、『ローカーヤタ・スートラ』成立以前の、すなわち、体系化される以前のローカーヤタ派に関して考察することになる。

なお、この小論で扱う原典は、次の通りである。

AN. = *Aṅguttara-Nikāya*.

AN. A = AN. *Aṭṭhakathā (Manorathapūranī)*.

DN. = *Dīgha-Nikāya*.

DN. A = DN. *Aṭṭhakathā (Sumaṅgalavilāsinī)*.

MN. = *Majjhima-Nikāya*.

MN. A = MN. *Aṭṭhakathā (Papañcasūdanī)*.

SN. = *Samyutta-Nikāya*.

SN. A = SN. *Aṭṭhakathā (Sāratthapakāsinī)*.

Sn. = *Suttanipāta*.

これらパーリ原典に関しては PTS 本を使用する。

Isibhāsiyāim ; Isibhāsiyāim, L. D. Series 45, ed. by W. Schubring.

Ahmedabad. 1974.

Mahābhārata ; The Mahābhārata, for the first time critically ed. by

- V. S. Sukthankar (22vols.) Poona, 1927-1966 (批判校訂版)
Bhagavad-gītā; The *Bhagavad-gītā* with an Introduction Essay,
Sanskrit Text, English Translation and Notes, ed. by S.
Radhakrishnan. London, 1989.
- Laṅkāvatāra-sūtra*; *Saddharma-laṅkāvatāra-sūtram*, Buddhist Sanskrit
Series No. 3, ed. by P. L. Vaidya, Darbhanga, 1963.

2. パーリ伝にみるローカーヤタ派

パーリ伝『沙門果経』(*Dīghanikāya* 第二経, *Sāmaññaphalasutta*)には
仏教興期時代に活躍した自由思想家を代表する、いわゆる、六師外道の名とそ
の説が紹介されている。その六師とは、

- 1, プーラナ・カッサパ (Pūraṇa Kassapa)
- 2, マッカリ・ゴサーラ (Makkhali Gosāla)
- 3, アジタ・ケーサカムバリン (Ajita Kesakambalin)
- 4, パクダ・カッチャーヤナ (Pakudha Kaccāyana)
- 5, サンジャヤ・ベラッティプッタ (Sañjaya Belatṭhiputta)
- 6, ニガンタ・ナータプッタ (Nigaṇṭha Nātaputta)

である。その中で、アジタ・ケーサカムバリンは唯物論者であって、その主張
がローカーヤタ派の思想と接近しているため、従来、ローカーヤタ派の先駆者
であるといわれてきた。アジタの主張は次の四点に要約できる。

- (1) 布施, 祭祀, 供饗の否定
- (2) 現世, 他世の否定
- (3) 善悪業の果報の否定
- (4) 人間は四大種から構成

アジタのこれらの思想は断滅論 (Ucchedavāda) であると、『沙門果経』はマ
ガダ (Magadha) 国王アジャータサツ (Ajātasattu) の言葉を借りて伝えて
いる。しかし、なるほど、アジタの思想はローカーヤタ派の思想と近い関係
にあるのであるが、彼がローカーヤタ派の先駆者、あるいはローカーヤタ派の

系統であるとは、パーリ伝『沙門果經』を初め、漢訳『沙門果經』、異訳『寂志果經』、アッタカター (*Atthakathā*) などの諸資料にはその記述を見出すことはできない。

また、アジタだけに限らず、唯物論に近い、あるいは唯物論に基づくと考えられる見解を抱いていた思想家は他の五師の中にも見出せる。すなわち、パクダ・カッチャーヤナ、プーラナ・カッサパ、マッカリ・ゴースーラである。およそ彼らは、「善悪業の異熟果はなし」という見解を有し、中でもパクダ・カッチャーヤナは純粋な唯物論者ではないが、七要素説（地・水・火・風・苦・楽・靈魂）を説き、唯物論的思想を主張していたことは否定すべくもない。

しかしながら、彼らもまたローカーヤタ派の系統をくむものであるとは、パーリ伝『沙門果經』を初め、漢訳『沙門果經』、異訳『寂志果經』、アッタカターなどの諸資料にはその記述を見出すことはできない。

一方、アジタのような断滅論者がいたことをジャイナ敎の文献である『インパーシャーイム』(*Isibhāsiyāim*) 中のウッカラ (*Ukkala*) 章は伝えている。そこでは、次の五種の断見説が紹介されている。

- (1)杖の断見 (*Dand' ukkala*)
- (2)繩の断見 (*Rajj' ukkala*)
- (3)盜の断見 (*Tan' ukkala*)
- (4)部分的断見 (*Des' ukkala*)
- (5)一切断見 (*Savv' ukkala*)

この中の(5)一切断見は、高木諄元氏によってアジタ説と比定されている。¹²⁾ この説は、

Uḍḍhaṃ pāya-talā ahe kes' agga-matthakā, esa ātā-pajjavē kaṣiṇe taya-pariyante jīve, esa jīve jīvati, etaṃ taṃ jīvitam bhavati /
Se jahā ṇāmate daḍḍhesu biesu ṇa puṇo ankur' uppaiti bhavati,
evāṃ eva daḍḍhe sarīre ṇa puṇo sarir' uppatti bhavati, tamhā iṇaṃ eva jīvitam, ṇ' atthi para-loe, ṇ' atthi sukaḍa-dukkadaṇaṃ kammaṇaṃ phala-vitti-visese¹³⁾ /

足の裏より上、髪の色や頭より下、この自身に関する皮膚の終わりまで、

靈魂である。この靈魂は生命である。例えば、種子が焼かれる時、再び、芽の生起はない。同様に、身体が焼かれる時、再び身体が生ずることはない。それ故、これこそが生命であり、他世なく、善悪業の特殊な果報は存在しない。

とある。この説は次の三項目に要約されよう。

- (1) 身体は靈魂に他ならないということ。
- (2) 他世の否定。
- (3) 善悪業の異熟果の否定。

ここで、われわれは、この一切断見説がアジタの説と近い関係をもつということを知ることができるが、ここでもまた、ローカーヤタ派との確実な関わりを見出すことはできない。

次に、ニカーヤの中に見られる「ローカーヤタ (lokāyata)」という文字に検討を加えたい。その内容はおよそ四種に分けることができる。

- (1) 種々なる低俗な術 (tiracchāna-kathā) として列挙されている論議の中に (lokakkhāyika) (世間論) が数えられている。¹⁴⁾
- (2) 「lokāyata-mahāpurisa-lakkhaṇeṣu anavayo」(世間論及び大人相に関して通達したこと) をバラモン (Brāhmaṇa) の資格の一つに挙げられている。¹⁵⁾

ここでは「lokāyata」という文字が見られるが、唯物論との関連を見出すことはできない。また、そのみならず、学派としてのローカーヤタ派が成立していたことを証明するものではない。これに対して、次にあげる(3)、(4)は注目すべき資料であると考えられる。

- (3) SN. 12-48 「ローカーヤティカ (Lokāyatika)」経 (相当漢訳欠)。

Ekam antaṃ nisinno kho lokāyatiko brāhmaṇo bhagavantam etad
avoca /

Kiṃ nu kho bho Gotama sabbam atthīti /

Sabbam atthīti kho brāhmaṇa jeṭṭham etaṃ lokāyatam /

Kiṃ pana bho Gotama sabbam natthīti /

Sabbam natthīti kho brāhmaṇa dutiyam etaṃ lokāyatam /

Kim̐ nu kho bho Gotama sabbam ekattan ti /
Sabbam ekattanti kho brāhmaṇa tatiyam etaṃ lokāyatam /
Kim̐ pana bho Gotama sabbam̐ puthuttanti /
Sabbam̐ puthuttanti kho brāhmaṇa catuttham̐ etaṃ lokāyatam /¹⁶⁾

実に、一辺に座ったローカーヤタ派のパラモンは世尊に次のように言った。
「友、ゴータマよ、実に一切は存在するのか」

「バラモンよ、実に一切は存在するというのはこれは第一のローカーヤタである」

「友、ゴータマよ、実に一切は存在しないのか」

「バラモンよ、実に一切は存在しないというのはこれは第二のローカーヤタである」

「友、ゴータマよ、実に一切は一であるのか」

「バラモンよ、実に一切は一であるというのはこれは第三のローカーヤタである」

「友、ゴータマよ、実に一切は異であるのか」

「バラモンよ、実に一切は異であるというのはこれは第四のローカーヤタである」

とある。この經典には「ローカーヤタ派のパラモン」とあるから、すでにローカーヤタは一派を形成していたと考えられる。しかし、この經典からはその内容に関しては知りえない。そのため、ここでもローカーヤタと唯物論との関わりを見出すことはできない。

(4)AN. IX.「ブラーフマナー (*Brāhmaṇā*)」經 (相当漢訳欠)。

ある時、二人のローカーヤタ派のパラモンが世尊の許に至り、次の中でいづれが真実であるかを問う。

Pūraṇo bho Gotama Kassapo sabbaññū sabbassāvī aparisesaññānada-
ssanam̐ paṭijānāti / ... / So evam āha ‘aham anantena ñāṇena
antavantam̐ lokam̐ jānam̐ passam̐ viharāmi ti /

Ayam pi bho Gotama Nigaṇṭho Nāṭaputto sabbaññū sabbassāvī
aparisesaññānadaṣṣanam̐ paṭijānāti / ... / So evam āha ‘aham anta-

vantena nāṇena antavantam lokam jānam passam viharāmi ti/¹⁷⁾

友、ゴータマよ、プーラナ・カッサパは一切智者 (sabbaññū) であり、一切見者 (sabbassāvi) であり、一切智見 (aparisesaññānadassana) を有すると自認する。彼は次のように言う。

「私は無辺智によって有限なる世間を知見して、時をすごす」

友、ゴータマよ、かのニガンタ・ナータプッタも一切智者であり、一切見者であり、一切智見を有すると自認する。彼は次のように言う。

「私は有辺智によって有限なる世間を知見して、時をすごす」

とある。この經典によってもローカーヤタ派のバラモンがどのような思想を抱いていたのかは見出すことはできない。ただ、その内容から見て、彼らがローカ (loka, 世間, 世界) に対して関心を抱いていたことだけは肯定されてよい。しかし、ここに至ってもローカーヤタと唯物論との接点を見出すことはできない。

そこで、以上取り上げた資料に対する『アッタカター (註釈文献)』を見ると、

(1)Lokakkhāyikā ti ‘ayaṃ loko kena nimmito?’ ‘Asukena nāma nimmito’ / ‘Kāko seto aṭṭhinam setattā, balākā rattā lohitaṣṣa rattattā’ ti evamādikā lokāyata-vitaṇḍa-sallāpakathā/¹⁸⁾

世間論というのは、「この世間は何人によって創造されたのか」[と問われると]「まさに、そのような人によって創造された」[と答える。それは]、「鳥は白い。何となれば、彼らの骨は白いから。鶴は赤い。何となれば、彼らの血は赤いから」というような世間の説に従う詭弁論の説である。

(2)Lokāyatam vuccati vitaṇḍa-vāda-sattham /¹⁹⁾

ローカーヤタとは詭弁論の教えを言う。

(3)Lokāyatiko ti, vitaṇḍa-satthe lokāyate kataparicayo /²⁰⁾

ローカーヤティカ (ローカーヤタ派) とは世間の領域の詭弁という教えに関して巧みなる者という意味である。

(4)Lokāyatikā ti lokāyatapāṭhakā /²¹⁾

ローカーヤティカ (ローカーヤタ派) とはローカーヤタを専門とする者のことである。

とあり、『アッタカター(註釈文献)』においても、ローカーヤタ派は唯物論者であるという記述を見出すことはできない。むしろ、ニカーヤにおいてはすでに雲井昭善氏によって明らかにされたように詭弁論に関わりがあるようである。²²⁾

3. ローカーヤタと唯物論

さて、次に紀元前後から六世紀にかけて成立した資料に基づいて検討してみたい。

『マハーバーラタ』(*Mahābhārata*)の中に「Cārvāka」,「Lokāyatika」という語を見出すことができる。それは次のごとくである。

Cārvāka : 1-2-63.

12-39-22.

12-39-33.

12-39-39.

12-39-47.

Lokāyatika : 1-64-47.

しかし、これらの中にあっては「Cārvāka」,「Lokāyatika」という名のみが挙げられており、唯物論との関わりを見出すことはできない。²³⁾ また、その反対に『マハーバーラタ』の中に唯物論に基づくと考えられる思想も見られるが、ローカーヤタとの関わりを見出すことはできない。一例をあげると、

Avināśo 'sya sattvasya niyato yadi bhārata /

Bhittvā śariraṃ bhūtānaṃ na hiṃsā pratipatsyate²⁴⁾//12-13-6//

バーラタよ、もし、かの生あるものが不滅であり、不変であるならば、生あるものの身体を滅して[も]、殺生とはなり得ないだろう。

などとある。また『マハーバーラタ』の一節をなす『バガヴァッド・ギーター』(*Bhagavad-gītā*) 16-8 に、

Asatyam apraṣṭham ca jagad āhur anīśvaram /

Aparasparasambhūtaṃ kim anyat kāmahaitukam²⁵⁾//

世間は、真理なく、根拠なく、自在神なしと言う。

順次に発生したものではなく、愛欲に起因するものに他ならない。

とあり、唯物論に立つ者の主張が見られる。しかし、「ローカーヤタ」、あるいは「チャールヴァーカ」という語は見当たらない。そのため、ここでもローカーヤタと唯物論との接点を確認することはできない。

この中であって次に取り上げる『ランカーヴァターラ・スートラ』(*Laṅkāvatāra-sūtra*: A. D. 400 年)に伝承されているローカーヤタ派は注目される資料の一つである。²⁶⁾ 従来、この経に伝承されたローカーヤタ派は詭弁論者であると言われてきた。しかし、その内容を仔細に検討すると詭弁論のみならず、唯物論の思想も見られるのである。それは、次の如くである。

Lokāyatiko vicitramantrapratibhāno na sevitavyo na bhaktavyo na paryupāsītavyo yaṃ ca sevamānasya lokāmiṣasaṃgraho bhavati na dharmasaṃgraha iti²⁷⁾/

種々なる言辭や弁才を有するローカーヤタの徒は、仕えられるべきではなく、供養されるべきではなく、尊敬されるべきではない。そして、それに仕える者には世間的な欲望の獲得があっても、法の獲得はないと。

とある。ローカーヤタの徒に仕えるものには世間的な欲望の獲得があるということ、詭弁論としてよりも、むしろ、唯物論に関わりがあると考えられるのではないか。

また、次のような記述も見られる。

Śarīrabuddhiviṣayopalabdhimātram hi mahāmate lokāyatikair deśyate vicitraiḥ padavyañjanaiḥ²⁸⁾/

実に、マハーマティよ、ローカーヤタの徒は種々なる句や音節によって身体に基づく認識による対象の把握のみを説く。

とある。また、その相当漢訳(菩提流支訳)では、

「盧迦耶陀婆羅門所說之法。但見現前身智境界」²⁹⁾

とあり、菩提流支は、「現前」という語を補って訳している。このことから、この一文は知覚のみを認めるローカーヤタ派の思想を意味しているのではないだろうか。

さらに、他世 (paraloka) の存在をめぐる龍王クリシュナパクシカ

(Kṛṣṇapakṣika) が世尊と議論したとする記述が『ランカーヴァターラ・スートラ』におけるローカーヤタ派に関する一連の解説の中に見られる。

Atha khalu kṛṣṇapakṣiko nāgarājo brāhmaṇarūpeṇāgatya bhagavāntam etad avocāt / tena hi gautama paraloka eva na samvidyate / tena hi māṇava kutas tvam āgataḥ / ihāhaṃ gautama śvetadvipād āgataḥ / sa eva brāhmaṇa paralokaḥ / atha māṇavo niṣpratibhāno nigrhīto antarhito...³⁰⁾ /

実に、その時、龍王クリシュナパクシカは、バラモンの姿をして世尊に近づき、次のように言った。

「ところで、ガウタマよ、他世というものは存在しない」

「それならば、青年よ、あなたはどこから来たのか」

「ガウタマよ、私は白い島からここにやって来た」

「バラモンよ、それこそが他世である」

そこで、青年は弁才なく、負かされ、隠れ去った。

とある。ここでは、龍王クリシュナパクシカは他世の存在を否定したのであるが、この他世否定という思想は、詭弁論としてではなく、唯物論に基づくものである。

また、『ランカーヴァターラ・スートラ』にはローカーヤタ派に関する一連の解説の箇所以外にも唯物論者としてのローカーヤタ派の思想が見出せる。無常性 (Anityatā) 品に「無常」に関して八種の外教 (tirthakara) の説が見られるが、その中の一説に、

Tatra samsthānānityā nāma yad uta yasya rūpam evānityaṃ tasya samsthānasyānityatā na bhūtānām / atha bhūtānām anityatā syāt, lokasamvyavahārābhāvāḥ syāt / lokasamvyavahārābhāvāl lokāyatikadr̥ṣṭipatitaḥ syāt, vāgmātratvāt sarvabhāvānām, na punaḥ svalakṣaṇotpattidarśanāt³¹⁾ /

その中で、形の無常というものは、すなわち、およそ色そのものが無常であるそのものには形の無常性があるのであって、[四]大種に〔無常性があるので〕はない。もし、[四]大種に無常性があるのならば、世間的な言語習

慣はなくなるであろう。世間的な言語習慣がないからローカーヤタ派の見解に陥るであろう。何となれば、すべての存在には言葉のみということがあって、決して本性の生ずることを見るからではない。

とある。これは四大種のみが常住であり、それに対して四大種から成る集合体は無常であり、「瓶」などという言葉は四大種から成る集合体に与えられる仮の名称にすぎないとする唯物論思想である。

以上のように『ランカーヴァターラ・ストラ』には、

- (1)ローカーヤタ派に仕える者には世間的な欲望の獲得がある。
- (2)知覚のみを認める。
- (3)他世存在の否定。

- (4)四大種のみが常住であり、四大種から成る集合体は無常である。

という唯物論の思想が見出せる。ここで初めて「ローカーヤタ」と「唯物論」との接点を確認できるのである。

次に『ランカーヴァターラ・ストラ』より後の資料であるが、『大乘広百論釈論』（護法 Dharmapāla, A. D. 530-560）を取り上げねばならない。その理由はここには体系化されたローカーヤタ派の思想の幾つかを確認することができるからである。それを見ると、

「復次順世外道作如是言。諸法及大種為性。四大種外無別有物。即四大種和合為我及身心等内外法。現世是有。前後世無。有情數法如浮泡等」²²⁾

云々とある。順世外道、すなわち、ローカーヤタ派の主張は次の三点に要約することができる。

- (1)四大種のみが真の実在である。
- (2)我（アートマン）や心、身体などの内的、あるいは外的な存在は四大種から成っている。
- (3)現世のみが存在し、前世・来世といった他世は存在しない。

これらの思想は、前述した『ランカーヴァターラ・ストラ』に見られる思想の幾つかと共通する。

さらに、『金七十論』巻中（真諦訳、訳出年代A. D. 548-569）にもローカーヤタ派の思想が見られる。

「路歌夜多論説。此云世入。

＜能生鵝白色。鸚鵡生綠色。孔雀生雜色。我亦從此生＞」³³⁾

とある。この思想は、現象の多様性は本性に基づく自然発生的なものであるという唯物論に基づく思想である。また、「路歌夜多」(Lokāyata の音写語)とあることから、われわれは、ローカーヤタと唯物論との接点を確認することができる。³⁴⁾

このように『マハーバーラタ』にはローカーヤタと唯物論の接点を確認できなかったものの、『ランカーヴァターラ・スートラ』、『大乘広百論積論』、『金七十論』においてローカーヤタと唯物論の接点を確認することができるのである。それらの諸文献の成立年代より見て、西暦後 400 年にはローカーヤタは唯物論的傾向を有する一派として成立していたと考えられる。

4. 結論にかえて

以上、ローカーヤタと唯物論との接点を探ってみた。その結果、『ランカーヴァターラ・スートラ』に至って初めてローカーヤタと唯物論との確実な接点を確認できることをわれわれは知ったのである。³⁵⁾

また、(1)ローカーヤタ派に仕える者には世間的な欲望の獲得があるということ、(2)知覚のみを認めるということ、という思想はローカーヤタ派の思想史を考察する上で重要な位置を占めていると考えられる。その理由は、これ以前における唯物論の伝承は、前述したように仏教資料としてはパーリ伝『沙門果経』に伝承されるアジタ・ケーサカムバリン説、ジャイナ教資料としては『インバーシャーイム』第20章「ウッカラ」などに見られるが、それらの中にあつては、世間的な欲望を得るということ、知覚のみを認めるという思想は見出すことはできないからである。ただ、唯物論という立場から考えていくとアジタなどの唯物論者が世間的な欲望の獲得を人々に説き、正しい認識手段として知覚のみを認めていたということも全く理解できないわけではない。しかし、これらの思想は『沙門果経』などの資料に徴する限り見られない。また、前述したようにそれらの資料のいずれも唯物論がローカーヤタ派の思想であるとは明

記していない。従って、『ランカーヴァターラ・スートラ』に至って初めて、世間的な欲望の獲得、正しい認識手段として知覚のみを認めるという理論を確認することができるのである。

さらに、『ランカーヴァターラ・スートラ』が体系化されたローカーヤタ派の思想を伝える資料（『サルヴァ・ダルジャナ・サムグラハ』、『タットヴァ・サムグラハ』など）に見られるローカーヤタ派の思想の幾つかを早くから伝承していることから、『ランカーヴァターラ・スートラ』の成立した頃、すなわち、西暦後400年にはローカーヤタ派は「唯物論的な傾向を有する一派」としてすでに成立していたのではないかと考えられる。その意味においても『ランカーヴァターラ・スートラ』に見られるローカーヤタ派の伝承はその思想史を探る上で貴重な資料であるといえる。

最後に、体系化されたローカーヤタ派の理論とここで取り上げた資料との対照表を掲げてこの小論を終えることにする。

	<i>Lankāvatāra-sūtra</i>	大乘広百論 釈論	金七十論	沙門果経 アジタ説	<i>Isibhāsiyāiam</i> 一切断見説
(i)	○	/	/	/	/
(ii)	○	○	/	○	/
(iii)	/	○	/	/	/
(iv)	/	/	○	/	/
(v)	△ ※	○	/	/	○
(vi)	○	○	/	○	○
(vii)	○	/	/	/	/
(i)	Pratyakṣaikapaṛmāṇavāda				
(ii)	bhūtamātravāda				
(iii)	bhūtacaitanyavāda				
(iv)	svabhāvavāda, svābhāvīkajagadvāda				
(v)	dehātmavāda, dehamātrātmadarśana				
(vi)	paralokapāvāda				
(vii)	kamārthavāda				
※ <i>Lankāvatārasūtra</i> (p. 47) に tirthakara (外教) の説として「Sa jivas tac					

chariram] (かの靈魂それは身体 [そのもの] である。) とあり, Dehātmavāda の思想が見られる。しかし, これがローカーヤタ派の思想であるという明記はないので△印とした。

註

- 1) 大正30, 168 c.
- 2) *Laṅkāvatāra-sūtra*, p. 71.
- 3) 大正16. 503 b.
- 4) 大正16. 547 c.
- 5) 大正16. 612 c.
- 6) 文脈にしたがって理解のために lokāyatānām を補充した。 *Tattvasaṃgraha-pañjikā*, ed. Dwarikadas Shastri, *Bauddha Bhārati Series*, Varanasi, 1968, p. 634.
- 7) *Advaitabrahmasiddhi*, ed. Vaman Sastri, *Parimal Sanskrit Series No. 5*, Delhi, 1993, p. 99.
- 8) 生井衛「後期仏教徒による Bārhaspatya 批判[1]——Bārhaspatya 思想の概観——」, 『インド学報』2号, 1976.
- 9) 生井前掲, 論文 pp. 45-46.
- 10) 雲井昭善氏は「マードヴァのチャールヴァーカ・ダルシャナは, 極めてまとまった紹介書として, [中略] そこに伝えられるローカーヤタ思想は, それ以前にもなされた, インド哲学のその他の文献 [中略] に伝えられるローカーヤタ (=チャールヴァーカ) と一致している」から「ダルシャナに伝承されたローカーヤタ思想は, マードヴァの著において集約されていた」と見る。雲井昭善『仏教興期時代の思想研究』平楽寺書店, 1967, pp. 100-101
- 11) 龍山章真氏は「確定的には言えないが, 西紀前第三世紀から唯物論的な学派名として用いられる」とする。(龍山章真「lokāyata に関する研究」『大谷学報』11-1) しかし, 龍山氏の論証は推測の域を出ず, 内容の検討も不十分である。
- 12) 高木神元『初期仏教思想の研究』法蔵館, 1991, p. 153.
- 13) *Isibhāsiyām*, p. 38
- 14) 長部第一經 *Brahmajāla-sutta DN*. vol. 1, p. 11. 第二經 *Sāmaññaphala-sutta DN*. vol. 1, p. 66, 中部 *Sandaka-sutta MN*. vol. 1, p. 513 など。
- 15) 長部第三經 *Ambaṭṭha-sutta DN*. vol. 1, p. 88. 第四經 *Sonadaṇḍa-sutta DN*. vol. 1, p. 114. 第五經 *Kūṭadanta-sutta DN*. vol. 1, p. 130. *Sn*. p. 105 など。
- 16) *SN*. vol. 2, p. 77.
- 17) *AN*. vol. 4, p. 428.

- 18) *DN. A.* vol. 1, pp.90-91. *MN. A.* vol. 3, p.223. *SN. A.* vol. 3, p.295.
AN. A. vol. 4, pp.46-47.
- 19) *DN. A.* vol. 1, p.247. *MN. A.* vol. 3, p.362.
- 20) *SN. A.* vol. 3, p.76.
- 21) *AN. A.* vol. 4, p.200.
- 22) 雲井前掲書, pp.96-125.
- 23) 「12-39」においてチャールヴァーカ (Cārvāka) という文字がまとまって見られるが、ここでは、チャールヴァーカという名のラクシャサ (Rākṣasa) がユディシュティラ (Udhiṣṭhira) 王を罵るという内容であり、唯物論との接点を見出すことはできない。
- 24) *Mahābhārata*, 13vol. p.47.
- 25) *Bhagavadgītā*, p.336.
- 26) 拙稿「ランカーヴァターラ・スートラに見られるローカーヤタ派」『印度学 仏教学研究』43-1. pp.446-444参照。
- 27) *Laṅkāvatāra-sūtra*, p.70.
- 28) *Laṅkāvatāra-sūtra*, p.71.
- 29) 大正16, 547 c.
- 30) *Laṅkāvatāra-sūtra*, p.73.
- 31) *Laṅkāvatāra-sūtra*, p.84.
- 32) 大正30, 195 c.
- 33) 大正54, 1252 a.
- 34) この他『有部毘奈耶』卷35に「是盧迦曳多説無後世」(大正23, 817 b)とあり、ローカーヤタ派の他世否定の思想が見られる。
- 35) 前掲拙稿参照。